

関東大震災の教訓

児玉 寛嗣

今年で関東大震災の発生から百年目を迎えた。この震災の惨事を物語る地を訪れた。大江戸線の両国駅を出て北に向かつて少し歩くと都立横網町公園が見えてくる。

この場所には震災の数年前までは軍服を作る陸軍の被服廠があった。被服廠が赤羽に移転したので震災時には二万坪以上もある広大な空き地となっていた。震災直後に下町の各地で火災が起きていたが、この地は絶好の避難場所として警察官も多くの人を誘導して約四万人の避難民で立錐の余地もないほどの込み合いだった。

人々は家から持ち出した家財道具を携えており、なかには大八車にいっぱい荷物積んで避難してきた人もいた。初めは人々には無事に避難できたことで安堵の表情が見られた。しかし、強風が吹いていたこともあり、火が四方から襲いかかり、家財道具に引火して、火勢が強くなり大旋風も起こって、人や家財道具が空中高く巻き上げられて焼き尽くされた。焼け跡は遺体の山となり三万八千人もの人が焼死した。

公園の一角にアールデコ調の三階建ての建物がある。関東大震災復興記念館である。震災後、数年を経た昭和六年に建てられたものであり、大震災の被害、救援、復興を表す遺品や被災物、絵画、写真などが展示されている。焼けたトタンが大旋風で吹き飛ばされ、布切れのように木の枝に巻き付いたものなど、その恐ろしさをまざまざと見せつけられた。

東日本大震災では津波の被害が甚大であったせいか、津波への警戒が大きく叫ばれているが、火災に対する備えも同様に必要である。地震直後は倒壊したビルなどで道が塞がれ消防車の出動もままならないだろうし、消火栓も地震のため使用できなくなっている可能性が高い。火災が起きると手がつけられなく大火災になる。下町など木造の人家の密集している地では消火器設置の義務化、定期的な消火訓練実施などの対策が必要になってくる。大火災の恐ろしさはハワイ・マウイ島の山火事で目の当たりにしたばかりでもある。